

渺たる南海の一小島ガダルカナルを廻りて、日米兩軍の間にその争奪戦行はる。昭和十七年八月七日ヴァンデグリット中將率ゐる米第一海兵師團の同島上陸に端を發し、爾後延々數箇月に及べり。

その間、第一次より第三次迄のソロモン海々戦生起し、更に之に南太平洋海戦を挿みて相互に勝敗あり。一時は白熱化せるも戦勢次第に我に非となり、遂にはガ島抛棄論も湧出するに至る。

されども既に島上に在りたる陸兵一萬餘の補給漸く細り、將兵飢渴に苦しむに至るを奈如せん。

もとより軍需物資の運送は船舶に依れども、それを護衛するは海軍の任なり、第二水雷戦隊司令官田中頼三少將主として是を宰す。

當初は輸送船に必要物資を頼み、艦艇是を守護する通常のコンヴオイ方式を採れるも、敵機の妨害次第に激化し、遂に高速輕快部隊自身に軍糧を搭載して突入せざるを得ざる事態となりたり。軍艦の事なればその一隻の運び得るは少量となるも已むを得ず。従事する將兵之を「鼠輸送」乃至「丸通^{まるつう}」と自嘲す。

米軍機は我が輸送作戦を汎稱して「トウキョウ・エクスプレス(東京急行)」と揶揄せり。然して之を遮る可く種々畫策。先づ總指揮官ハルゼー、カールトン・ライト少將をして重巡四隻、輕巡一隻、驅逐六隻の大部隊を編成せしめてガ島方面に送る。

片や我が方は第三次ソロモン海々戦より約二週間後の十一月二十九日、東京急行を再興す可く驅逐艦八隻の一隊をして中繼地たるショートランド群島を出でしむ。孰れも特型驅逐艦「吹雪」級の發展型なる俊英にして、「長波」、「高波」、「親潮」、「黒潮」、「陽炎」、「卷波」、「江風^{かは}」、「涼風」の八艦なり。指揮官は今回も田中少將、その將旗を「長波」に掲ぐ。暫時東行したる後に南下、ガ島に向ふ。目的地は北岸のタサフアロンガ及びセギロウなり。

翌三十日夜半に近き頃、敵大勢力を發見。本來の目的たる物資輸送の困難となり來りたるを危ぶむ。この突如たる大敵の出現にも田中少將端然として動ぜず。先づ積載物揚陸作業の中止を命じ、次いで「全軍突撃せよ」の號令を麾下全部隊に下達す。各艦何れも反轉し、全體として北西方向に進みつゝ、夫々適切なる射點を得て魚雷を發射且砲火を開く。

この際、煩を厭はず、我が魚雷に就き一言せん。通常魚雷は水中を進行するに空氣を以てその機關の燃焼に充つ。米英の魚雷も亦その範疇を出でざれば、その速力三〇節^{ノット}前後にして、射程は八^{キロ}程度なり。獨り我が日本海軍のそれは空氣に換ふるに純酸素を以てし、爲に雷速四十^{ノット}節ならば射程三二^{ノット}、五十^{ノット}節の場合は二〇^{ノット}に及べり。米英に優ること霄壤^{せうじやう}の差あり。

日本人多くは「零戦」と「戦艦大和」を以て日本科學技術の粹と誇れども、この酸素魚雷も亦夫等に比肩するものと謂ひ得可し。